

今はない町

大村伸一

海辺の地方でその町の遺跡が発見されたのはもう十年余りも前のことだ。当時はずいぶん騒がれたが、今ではほとんど忘れられている。蟻の巣のように岩の内部に穿たれた穴に町は潜んでいたもので、幾つもの文明が興りそして滅んだあと、ようやくその町は我々の前に戻ってきた。水面よりも低いその町が長い年月の間海水に沈みもせず、栄えていた頃のままでの姿を残していたのは、当時の人々が町を囲む地勢をよく理解していたからだろう。

町を発見した発掘隊は、最初、町が今も生きていて人々が当たり前のように生活していると思ったという。町には長い年月の間に積もったはずの堆積物やごみすらなく、岩の内部に作られた道路には今通ったばかりのように新しい車輪の轍があったし、住居はいずれも朽ちたり崩れたりした部分などがなく、窓のガラスも今磨きあげられたばかりのように輝いていた。ガラスが溶けて歪んだ形跡もない。さらに、住居の内部に立ち入った彼らは、寝室に眠る住人達を発見した。勿論、ベッドに横たわっていたのは幾千年も昔に絶命した住人達の遺体なのだが、化石にも土にもなっていない遺体は、まるで眠っているように見えたのだという。科学者は、町が水面下にあるため、気温がずっと零下を保ち、海流と気流が腐敗菌を完全に防御したため、このような奇跡が起きたのだと説明した。原理は分かっても、再現することは不可能だとも言った。二百体余りの遺体は最優先で近隣の大学の冷蔵庫に運ばれた。発掘隊の侵入により町の気温が上昇し、数千年前には存在しなかった細菌が持ち込まれ、それらすべてが原因となって遺体を破損することを防ぐためだった。

無人となった町は、水面下の古代に作られた池底都市であることを忘れさせるほど広く、発掘隊の仕事は何ヶ月も続けられた。発掘といっても、土や岩に埋れているわけではなかったので掘り起こす労力は不要であり、ただひたすら広大な町をいかに保存し、そこで発見された物物をいかに分類し整理するかが、彼らの仕事だった。発掘は順調にすすみ、それに連れて古代遺跡の発掘につきものの怪談話も生まれた。町の中央広場には、地表から天井の岩肌にまで達する大きな柱に時計を埋め込んだ時計台とでも呼ばれるべき構築物があった。時計は一時間に一度だけ鳴り響くのだが、うわさでは時報と同時に遺体だったはずの街中の住民が町に再び現れるのだという。しかし、肉体を別の場所に移され、自分の身体に戻れなくなった住民達は悪霊となり、身体を求めて町をさまよう。運悪く発掘隊の隊員が霊に触れると、彼は魂を失い肉体を奪われるのだ。事実は分からなかったが、そのようにして正気を

失った隊員が増え、隊長は広場の時計台の時計を止めるように命じた。しかし、何千年という時を刻んできた時計台は、彼らの暴力に屈することなく時間を知らせ続けたので、時を告げる鐘に毛布を巻きつけ、時が響かないようにすることでようやく隊長は面目を保った。

町には店や会議場だけでなく、浴場や図書館もあった。食料品店は清潔ではあったが当然、商品は並んでいなかった。大工道具の店は、かなづちやノコギリの類が錆びひとつなく並べられていた。会議場は百人ほどが入れる広さがあり、その席でみつけられた遺体も数十はあった。浴場は二十人を入れるおおきな湯船があり、たっぷりのお湯が張られていた。お湯を沸かしているのではなく、海底の温泉が引かれていて、巧妙な仕掛けにより風呂の洗浄すら自動的に行われるようになっていた。図書館には数えきれないほどの本が所蔵されていた。本は薄く延ばされた金でできた四角い紙を束ねたもので、金の表面に文字が打刻されていた。金でできた本は重く、岩を抉った棚にきちんと整理され保管されてはいたが、取り出すのは大仕事だった。本の下敷きになり足や太腿の骨を折る者が何人も出たし、中には圧死する者も出てきた。それでも貴重な資料を研究するため、図書館は一番最初に保存されることが決まった。

本に書かれた文字と言語の解明から、研究は着手された。文字の構造は半年ほどで判明した。基本となる50個あまりの文字は厳密な規則に従って表記されており、個々の文字を見れば発音の方法も分かった。そのため、死語ではあったが声に出して読むことができるようになった。しかし、文法の解明には、基本的な部分だけで三年を必要とした。というのも、われわれの世界の言語であれば普通に備わっている「現在時制」というものが、この言語には欠けており、それに気づくまでに二年ほどかかってしまったからだ。基本的で当然と考えられているものが存在しないことに気づくには、時間がかかるものだ。

この言語には「過去」について五つ、「未来」についてやはり五つの時制がある。厳密には我々の言う「過去」や「未来」とは意味が違うのだが、便宜上、そう呼ばれている。「過去」について言えば、「他とは関連を持たない点としての過去」、「過去のできごとと関連を持つ過去」、「未来のできごとと関連を持つ過去で過去に焦点がある場合」、「起こりえなかった過去」、「未来だったかもしれない過去」の五つが時制としてあり、「未来」についても「過去」と「未来」を入れ替えて同じような時制が五つある。すなわち、「他とは関連を持たない点としての未来」、「未来のできごとと関連を持つ未来」、「過去のできごとと関連を持つ未来で未来に焦点がある場合」、「起こりえないだろう未来」、「過去だったかもしれない未来」の五つである。この中のいくつかについては時制と呼ぶべきではないという言語学者もいて、十年たった今でも議論は続いており文法は確定しているわけではないが、それはこの言語に限ったことではない

だろう。

この言語では、「過去」と「未来」の時制をさらに組み合わせることができ、たとえば「過去と関連のある未来となるかも知れないが起こりえなかった過去となりうるかも知れない未来」を表す時制は、古典の中ではよく用いられる。名文と呼ばれる文章を読むと、このように複雑に時間を行き来する感覚にめまいを覚えるのであり、それが文学的な興奮となるのだという。言語学者にとって有利だったのは、図書館にある無数の書籍が言語を解明する上で絶対のよりどころとなった点だ。これほど完全な文献がこれほど大量にあるのだから、言語学者たちは、文献の海を泳ぎ、語彙を収集し文法を精錬していった。

言語学者達の研究は研究の本筋とは関係のないさまざまな障害に会った。十年たった今も基本的な文法以上にあまり明確になっていないのはそのせいだ。たとえば、文献の調査を進めて数ヶ月もすると、研究者達の多くが深い眠りについたまま目覚めなくなった。数日で目覚めるものもいたが、眠り続けるものもいて、医者はこの図書館あるいは町に棲息する古代の細菌が彼らの脳を侵し眠り続けさせているのだらうと分析した。しかし、その細菌を発見することはまだできていない。眠り続ける者たちは次第に体が希薄になり、亡霊のようにも見たので、あの怪談話に組み込まれ、この町の悪霊が博士たちを自分の領分に引きずりこんで行ったのだと、噂する者が後を断たなかった。

この言語を学習した言語学者達は、嗜眠症を発症しなくてもいずれ例外なく注意力が散漫になり、言語学者以外の人達と話をすることが難しくなっていった。意外にも、言語学者同士では意思の疎通には何の問題もないらしく、その言語の研究が前進し続けているらしいことは、医師にも見て取ることができた。ただ、言語学者以外の者は一人としてこれらの症状が出ないので、おそらく図書館にだけ存在する病原菌が原因だらうと考えられた。図書館の入り口から書棚、そして文献のすべてについて調査が行われた。しかし、疑わしい細菌はひとつも見つけられず、消去法によれば原因は細菌ではなく図書館に所蔵されている金の書物それ自体だということになった。金に棲息する細菌なのか金それ自体なのか、医師は今も調査を続けている。

調査団のアルバイトである学生が、怪談話の真偽を確かめるべく調査を行っていた。彼は詳細な日記をつけていたので、彼が行方不明になった後発見されたその日記は、非常に興味深いものだった。

彼は一週間に渡って図書館の入り口を見渡せる場所に椅子を置き観察したが、町の住人達の霊のようなものを目撃することはできなかったと記録していた。では霊が存在しないのかというところではなく、さっきまで何もなかったテーブルの上に気がつくとも食事が並んでいたり、自分ではそんなつもりはないのに浴場で体を洗っている自分に気づいたり、確かに霊のしわざだと考えなくては説明のできない現象はあったようだった。

学生の調査が始まって一週間ほどしたところから、彼の日記に別の誰かの手による記述が見られるようになった。学生は誰かの冗談だと思って友人達に確かめたが犯人は見つからなかった。最初は数式のような物が書かれていたのだが、やがてこんな文になった。

「君は現在にいるのか」

学生は一時間ほど考えたあげく、この文の次の行にこうかいた。

「私は今あなたの文を読みました」

そして、日記から目を離さずにいると、突然その次の行に文が出現した。

「話を聞かせてくれ」

それから彼は目に見えない相手との筆談を続けた。

相手はこの町に住む数学者だった。あの言語しか知らない町の住人達は現在という観念を持たず、つまり、過去と未来だけに生きていた。数学者は過去と未来の境界に現在という時間があると考えたが、その仮説を口にすると誰もが笑い、そんな考えには取り合わなかった。もしも「今」などというものがあつたとしても、それは一瞬よりも短い時間で未来か過去に消え去ってしまうのだから、誰もそれを認識することはできないし、認識できないものは存在しないのだ。彼らはみなそう彼に教えてくれた。数学者も感覚としては彼らのいう通りだと感じたが、彼の創造した無限級数方程式に解が存在することは、他ならない「今」の存在の可能性の証明だった。そして、可能性があるならば、それは存在するのだと、彼は知っていた。なんとか現在の存在を明らかにしたいと思いつけていたある日、数学者はテーブルの上に忘れられることになる日記に気づいた。日記は見たこともない文字で書かれた記憶があり、過去にも未来にも存在しているのに、書いた者はどこにもいることはないという想像が浮かんだ。それで、数学者は、その日記を書いた者がいたとしたら、彼か彼女こそが「現在」の住人になるだろうという想像が生まれた。

数学者は日記の文章を変数として、自分の無限級数方程式を変形し日記の意味を解くだろうと思った。やがて、解が計算された記憶が生まれ、それを元に文章を構成し日記に書き込んだ記憶になった。「君は現在にいるのか」はそのようにして日記に書かれた。すると、日記の次の行に新しい文が書き込まれるだろうという想像が生まれた。「私は今あなたの文を読みました

た」という文を、今度は方程式の変数に代入して計算を進めると意味が明らかになる未来が想像できた。未来で読み、過去で日記に書き込み「現在」という認識もできない瞬間にいる学生と対話した。

どこからともなく文字が生まれ日記に書き込まれてゆく理由は、数学者の言う以外に説明ができなかった。どこかぎこちない文章が、かえって数学者の説明が本当であると思わせた。数学者は、町に何人もの言語学者が訪れたことを報告していた。言語学者ははじめ「現在」について数学者の主張を支持してくれたのだが、やがて「現在」を理解できなくなり、数学者の仮説は不可能だと言うように変わったという。

このような学生の報告は勿論あまりにも馬鹿げていて、作り話としては陳腐だと言われ、誰も信じたりはしなかった。そのように受け入れられなかったことが原因なのかどうかは分からないが、学生は姿を消した。そして、発掘隊から彼への支払いは十年たった今も行われていない。